

PROGRAM NOTES

曲目解説

小宮正安 (ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授)

「中心を体験した周縁が、やがて押しも押されもせぬ中心となる…」今日のプログラムを眺めると、そんなテーマが思い浮かばないか。

クラシック音楽の本場というと、往々にしてオーストリアやイタリア、ドイツやフランスといった地域が挙げられがちである。「オーケストラ・ベストテン」のような企画でも、これらの地域に根差した団体の名前が列挙されるのは、よくあることだ。

だが、様々な価値観が生まれるようになった20世紀も後半になると、そうした見方に当てはまらないケースが出てくる。例えば当演奏会の主役である、ワシントン・ナショナル交響楽団がそれ。ヨーロッパから見れば周縁にあたるアメリカのオーケストラにもかかわらず、今や世界的名声を博している。

さらにアメリカ出身の作曲家の作品も、今やクラシック音楽にとっては欠かせない。その典型が、アメリカに生まれ育ったバーバー(1910-81)であり、彼が1938年に完成させた『管弦楽のためのエッセイ 第1番』である。しかも、古くからの「音楽の本場」であるイタリアの出身でありながら、アメリカで活躍した大指揮者トスカニーニ(1867-1957)の委嘱を受けて書かれた点がミソだ。内容的にも、クラシック音楽の祖といえるJ.S.バッハ(1685-1750)を彷彿させる創意工夫に溢れた対位法を用いつつ、アメリカの作曲家ならではの自由闊達な要素が盛り込まれている。

このような文脈に、チャイコフスキー(1840-93)も当てはまるだろう。彼のホームグラウンドであったロシアは、ヨーロッパの中では長らく文化の周縁地域だった。何しろ彼が後半生を送ったサンクト=ペテルブルクは、ロシアをヨーロッパ諸国のように近代化させるための象徴的存在として、ゼロから作られたという歴史を持つほど。

そんなチャイコフスキーにとって、ヴァイオリン協奏曲を手がけるとは、どのような意味があったのか。何しろこのジャンルに関しては、ドイツをはじめとするヨーロッパの中心において、それまでも幾つもの傑作が書かれてきたのだから…。

結果生まれた作品は、ニ長調を基本としつつ、全体は3つの楽章から構成されている。これなどは、チャイコフスキーが崇拝していたベートーヴェン(1770-1827)のヴァイオリン

協奏曲と同様のもの。ただしチャイコフスキーのそれがウィーンで世界初演された際、彼の地の有名批評家であったハンスリック(1825-1904)は、「悪臭を放つ音楽」と強烈な批判を浴びせた。つまり、ベートーヴェンのような堂々たる構築感を期待していたが裏切られた、という意味である。チャイコフスキーの代名詞ともいえる、底なしの憂鬱とそこから生まれるやるせない憧れが、曲のそこかしこに溢れているからだ。

実際この作品は、演奏不可能のレッテルを貼られることもあった。大幅なカットを加えて上演されることも少なくなかった。それは技術的な問題というよりも、むしろ「情」を前面に押し出した前代未聞のヴァイオリン協奏曲だったからである。まただからこそ同時代の価値観をはるかに超えた作品である。1878年に完成されてから150年近く経つ現在では、傑作ヴァイオリン協奏曲のひとつと讃えられている。

チャイコフスキーと同世代の**ドヴォルザーク**(1841-1904)も、周縁と中心の間を動き続けた作曲家である。オーストリアのいわば属国であったボヘミア(現在のチェコの西部)に生まれ、オーストリアの都であるウィーンを重要な活動拠点とした。にもかかわらず当のウィーンでは、周縁地域の出身者と見なされ、時に差別や屈辱を受けた。

そんな寄る辺のなさもあり、ドヴォルザークは国際的名声を得ようになると、ウィーン以外のヨーロッパ各地もしばしば訪問するようになる。大西洋を渡り、当時はまだ「新大陸」のアメリカでも活躍した。だが、自らの故郷への想いは断ちがたく、重度のホームシックに罹った末、ついには愛憎相半ばするヨーロッパへ戻ってゆく。

そんなアメリカ滞在中の1893年に作られたのが、『**交響曲 第9番**』だ。「新世界から」という副題が付けられているように、アメリカにいたドヴォルザークが、古巣のヨーロッパひいては故郷のボヘミアへ寄せた、望郷の念が溢れている。実際この作品には、アメリカ原住民の民俗音楽が随所で採り入れられているものの、それらを支えているのは、彼のルーツであるボヘミアの民謡と紛うばかりの切なさだ。「家路」の愛称で親しまれている第2楽章の旋律をはじめ、交響曲の結論部分ともいえる第4楽章が手の届かぬ彼方に消え去ってゆくような終わり方をするのも、その表れといえよう。

グローバル化や交通手段の発達を通じ、世界は小さくなった。だがそれゆえに、以前にも増して、文化の融合とは裏腹の文化の衝突も顕著になっている。イタリアに生まれ、ヨーロッパ各地で活躍してきた指揮者のノセダが、アメリカを代表するオーケストラを率いて、本日演奏する3つの名作。それは、かつて周縁だった地域に産声を上げながら、今やクラシック音楽の中心的存在となった作曲家の、憧憬と冒険と苦闘の軌跡に他ならない。